八尾南遺跡(第28次調査)

2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



八尾南遺跡(第28次調査)

2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部、旧大和川によって運ばれた土砂によって形成された河内平野の中心部に位置しています。古くから人々の生活の場として繁栄していた地域であり、現在も地面の下には先人が残した活動の痕跡や遺物といった貴重な文化遺産が数多く残されています。

近年、都市開発に伴う各種土木工事は増加の一途を辿っています。その中で消失の危機に晒される文化財の記録保存を行い、調査・研究を通じて明らかになった知見を文化遺産とし、後世に伝えていくことが我々に課せられた責務と考えています。

本書は、平成18年度に実施いたしました八尾南遺跡(第28次調査)の調査成果を収録したものであります。八尾南遺跡は、古くは1万年以上昔の地層から石器が出土することで知られている遺跡です。今回の調査では古墳時代前期から現代にかけての遺構面を複数確認することができました。特に、平安時代から中世にかけての条里水田は、当耕作地における土地利用の変遷を知る上で重要な成果といえます。

本書が地域史解明はもとより、埋蔵文化財の保護・普及の一助になれば幸いです。 最後に、発掘調査の開始当初から本報告の刊行にいたるまで、数々のご尽力をいた だきました関係各位の皆様方に心より御礼申し上げると共に、今後尚一層のご理解と ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

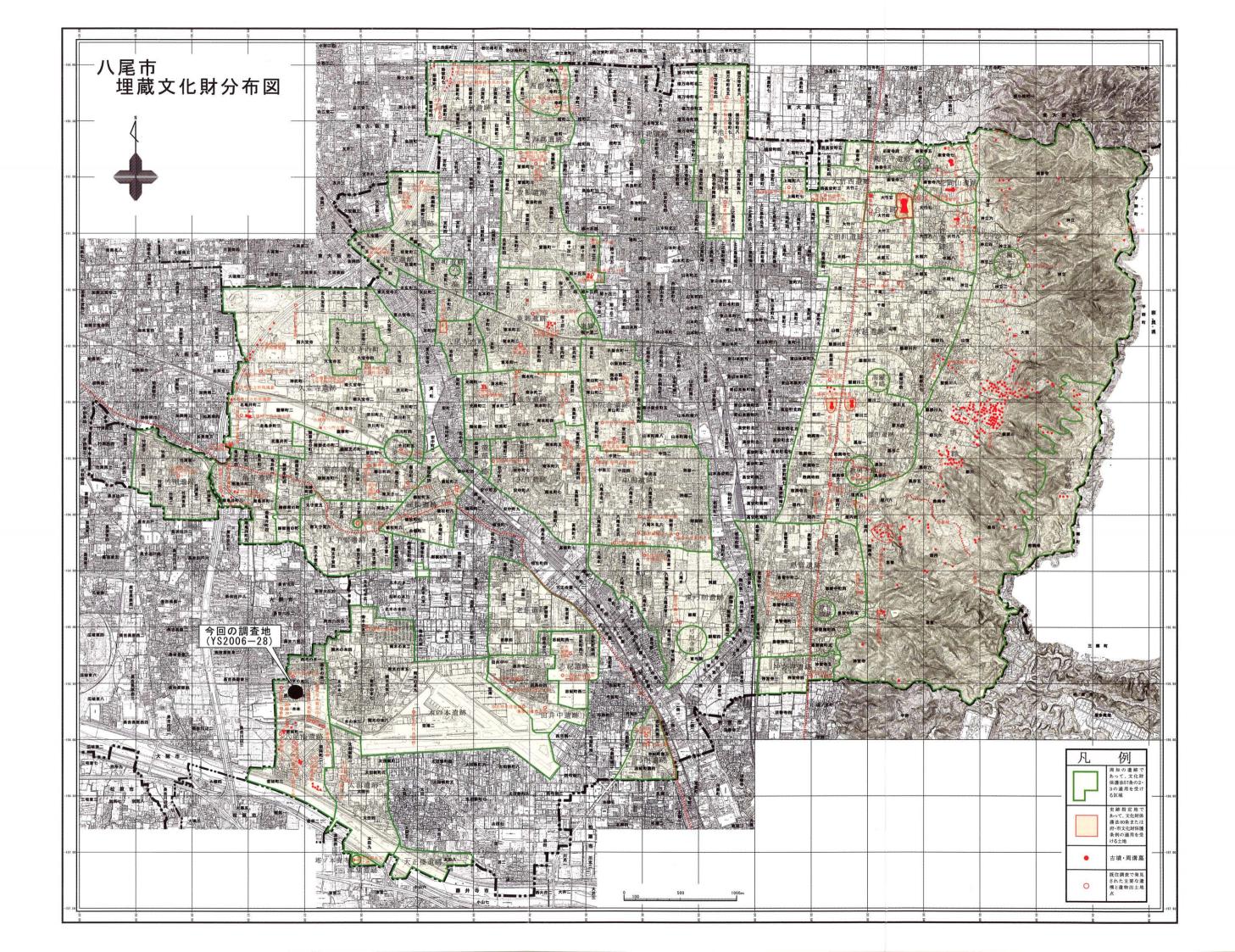
理事長 岩 﨑 健 二

例 言

- 1 本書は、大阪府八尾市西木の本四丁目地内で実施した、市営大正地区道路整備に伴う文化財発掘業務の報告書である。
- 1 本書で報告する八尾南遺跡第28次(YS2006-28)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1 現地調査は、平成18年2月6日~平成18年3月30日(実働30日間)にかけて、成海佳子を調査 担当者として実施した。調査面積は約724㎡である。
- 1 現地調査にあたった調査補助員は、飯塚直世・岡 真也・北野兼史・芝崎和美・鷹羽侑太・ 高津雅永子・玉野富士江・中村百合・西口佳奈・橋本黄士である。
- 1 内業整理および本書作成にかかる業務は、平成19年12月10日から開始し、平成20年3月19日 に完了した。
- 1 内業整理および本書作成にあたった調査補助員は、遺物実測-市森千恵子・永井律子・中村・ 村井厚三・村田知子・和田直樹である。本書の執筆及び編集は成海が担当した。
- 1 調査に関しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

凡例

- 1 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1地形図(平成8年7月発行)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成19年度版)を使用した。これ以外の地図を使用する場合は適宜明示した。
- 1 本書で用いた標高の基準はT.P.値(東京湾標準潮位)である。
- 1 本書で用いた方位は国土座標第VI系(世界測地系)の座標北を示している。
- 1 本書で用いた挿図の縮尺は、各挿図内のスケールに示している。
- 1 遺物実測図の断面は陶磁器・須恵器を黒、それ以外を白とした。
- 1 註・参考文献は各章末に記した。



本 文 目 次

はしがる	
八尾市均	里蔵文化財分布図
例言	
凡例	
第1章	はじめに \cdots 1
1	遺跡の概要とその環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2	条里制について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第2章	調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第3章	調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
1	基本層序8
2	検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第4章	まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	挿 図 目 次
第1図	調査地周辺図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第2図	調査地周辺の条里と国境・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第3図	条里復元図・・・・・・・5
第4図	調査区設定図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第5図	土層断面図(西壁・セクション)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第6図	河川 1 内杭検出状況平面図・立面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第7図	溝 7 平断面図11
第8図	土層断面図(北壁)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第9図	平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第10図	出土遺物実測図 1 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第11図	出土遺物実測図 2 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

表 目 次

	検出遺構一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第3表	出土遺物一覧表19
	図版目次
函肥—	【第1面】
	第1面西部(西から) 第1面東部(東から)
図胎 一	第2面】
	第2面西部(西から) 第2面東部(東から)
図版三	【第3面】
	第3面西部(南から) 第3面東部(東から)
図版四	【第4面】
,	第4面溝40(南から) 和同開珎出土状況(北から)
図版五	【調査前~第1面西部】
	調査前の状況 機械掘削の状況 調査杭設置 人力掘削開始
	A区河川1掘削 A区河川1上層遺構 E区河川1杭周辺掘削 第1面平板測量
図版六	【第1面中央~東部】
	D~F区河川1下層杭検出状況 E~F区同 E区同
	J 区溝 7 検出時 溝 7 完掘 溝 7 トレンチ掘削 J 区河川 8 掘削
図版七	【第2面】
	E区河川12掘削 F区同 I区河川13掘削 I区大畦検出時 H区以東河川12・大畦
	$\mathrm{H}\sim\mathrm{I}$ 区河川 $\mathrm{I3}$ ・大畦 $\mathrm{J}\sim\mathrm{K}$ 区河川 $\mathrm{I3}$ ・大畦 セクション G 東面
図版八	【第3面~第4面】
	E~F区大畦第3面へ人力掘削 I~J区同 J~K区同
	土坑27・小穴28・29 土坑36 溝37・38 北側壁面実測 G区溝40周辺平板測量
図版九	【出土遺物 1】
	河川1出土遺物
図版十	【出土遺物 2】
	河川1出土遺物 河川11出土遺物 河川12出土遺物 河川13出土遺物
	大畦盛土内出土遺物 溝42出土遺物

第1章 はじめに

1 遺跡の概要とその環境

八尾南遺跡は大阪府八尾市南西部に位置している。現在の行政区画では若林町1~3丁目、西木の本1~4丁目の西部にあたり、東西約0.5km、南北約1.3kmがその範囲とされている。

地理的には旧大和川及びその支流河川による活発な沖積作用によって形成された河内平野の南西部にあたる。地質的には概ね沖積地であるが、遺跡の南には羽曳野丘陵から連なる河内台地が、西には上町台地が存在しており、低地から台地への地形変化点にもなっている。遺跡北端部の現地盤は標高10m前後と最も低い。南にかけては緩やかに高くなり、南端部では12m前後となる。

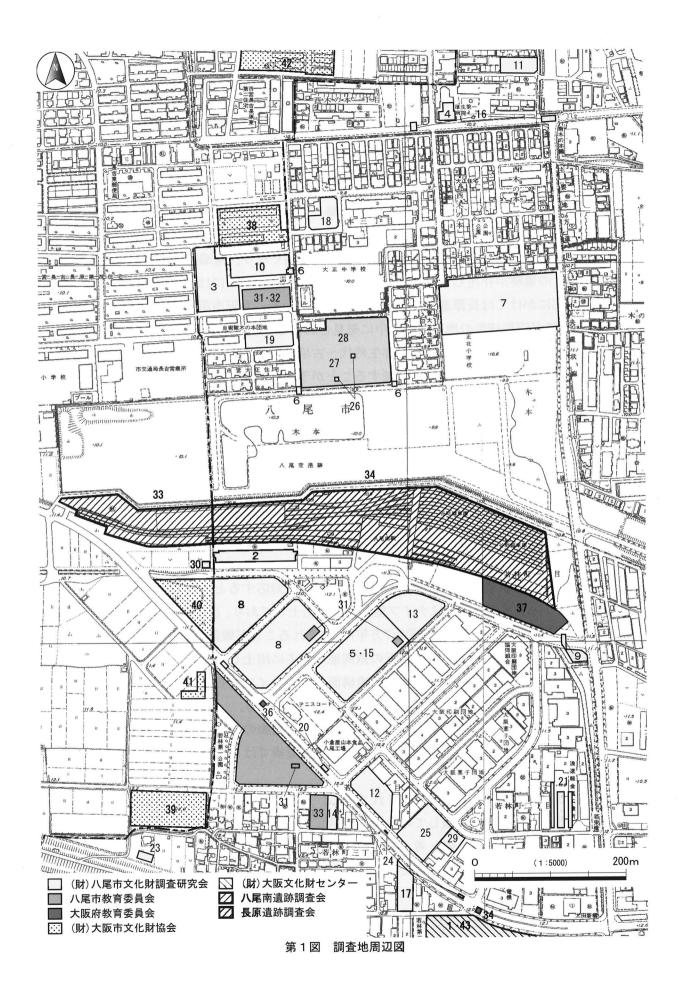
周辺には多くの遺跡が存在しており、北東には木の本遺跡、南東には太田遺跡が、市境を挟んで北部から東部にかけては長原遺跡がそれぞれ隣接している。大阪市所在の長原遺跡とは特に関係が深く、同遺跡が昭和48年の地下鉄工事中に発見されたことが当遺跡発見の端緒となっている。長原遺跡調査会による発掘調査の結果、弥生時代~古墳時代にかけての居住域や墓域が確認された。遺跡は東側の八尾市域においても連続することが予測されたため、同調査会による試掘調査が行われ、その結果、長原遺跡と連続性が認められる遺物包含層の存在が確認された。そして、これを受けて発足した八尾南遺跡調査会による発掘調査の結果、当遺跡が旧石器時代~中世にかけての複合遺跡であることが明らかとなった。その後、八尾市教育委員会によって行われた遺跡範囲確認調査によって遺跡範囲が拡大することが確認された。地下鉄完成後は区画整理が完了した八尾南駅南側を中心に土地開発が活発となり、それらに伴う発掘調査が大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって継続的に行われている。

以下に各時代の八尾南遺跡を概観する。数字は既往調査地で示しており、位置については第1 図を、調査内容については第1表を参照されたい。

旧石器時代では、長原遺跡における旧石器時代包含層に対応すると考える地層からサヌカイト 剥片が出土している。長原遺跡ではナイフ型石器等が出土しており、出土層には姶良Tn火山灰(約 2.2万年前)や大山下のホーキ火山灰(約1.7万年)が含まれることが確認されている。周辺では当該 期の開析谷が確認されており、遺物は付近の微高地から主に出土している。また、34では、ホー キ火山灰包含層直下に帰属すると想定される遺構面から、ナイフ型石器・角錐状石器・スクレイ パー等の石器のほか、接合関係が認められる剥片が出土している。

縄文時代では河道や溝等が検出されており、遺構からの遺物の出土もみられる。遺物では8・32で出土した縄文時代早期に比定される有舌尖頭器が、遺構では5で検出された後期の住居跡が代表的なものである。

弥生時代では主に居住域・墓域が確認されている。遺構は遺跡南部の微高地上に集中する傾向がみられ、一帯が居住地として適していたことを示している。そして低湿な環境であった北部では、主に水田が営まれていたものと考えられる。前期に関する成果では、15で古段階の壺が出土しており、5ではしがらみが検出されている。中期では17で居住域が検出されている。生産域関連では、13で水田が、42で耕作土とも考えられる粘質土が確認されている。後期では8・21・34・43で居住域が確認されている。特に43で検出された水田を伴う住居群は、氾濫堆積物に覆われた



第1表 調査地一覧表(第1図に対応)

番号	遺跡名(略号)	調査機関		種別	主な時代	文献
1	八尾南第1次 (VS92-01)	八文研	2600	墓域居住域	弥生時代~古墳時代	,駒沢敦 1984「3.八尾南遺跡(第1次調査)」 『(財)八尾市文
2	(YS82-01) 八尾南第2次	八文研	2500	居住域 墓域 生産域	平安時代~鎌倉時代 弥生時代~古墳時代	」化財調査研究会報告 5 』 「駒沢敦 1985 「1.八尾南遺跡(第2次調査)」 『財)八尾市文
	(YS83-02) 八尾南第3次		·	4 女长 B A Lt	奈良時代~鎌倉時代 古墳時代	化財調査研究会報告7』
3	(YS84-03)	八文研	900	生産域	平安時代	八尾市文化財調査研究会報告6』
4	八尾南第4次 (YS84-04)	八文研	630	居住城?	弥生時代~古墳時代	駒沢敦 1985 「3.八尾南遺跡 (第4次調査)」 『(財)八尾市 文化財調査研究会報告7』
5	八尾南第 5 次 (YS86-05)	八文研	4500	'生産域 '居住城	¦弥生時代 ¦古墳時代	駒沢敦 1988 「7.八尾南遺跡(第5次調査)」 『(財)八尾市 文化財調査研究会報告16』
6	八尾南第6次 (YS86-06)	八文研	120	生産域?	古墳時代~平安時代	西村公助 1987 「4.八尾南遺跡(第6次調査)」 『(財)八尾
7	八尾南第7次	 - 八文研	3043	!生産域	古墳時代	市文化財調查研究会報告14』 西村公助 1987 「VI. 八尾南遺跡(第7次調査)」 『(財)八尾
8	(YS86-07) 八尾南第8次			1	平安時代~鎌倉時代	市文化財調査研究会報告41』 原田昌則 1995 「I.八尾南遺跡(第8次調査)」 『八尾南遺
	(YS87-08) 八尾南第 9 次			墓域 居住城 	弥生時代~古墳時代	跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告47』駒沢敦 1988 「10・11.八尾南遺跡(第9次調査)」 『(財)八尾
9	(YS87-09)	- 八文研 	205		弥生時代 	市文化財調査研究会報告16』
10	八尾南第10次 (YS87-10)	八文研	696	生産域・居住域 生産域	古墳時代 平安時代	「成海佳子 1988 「12.八尾南遺跡(第10次調査)」 『(財)八尾 「市文化財調査研究会報告16』
11	八尾南第11次 (YS88-11)	八文研	100	?	弥生時代~古墳時代	成海佳子 1988 「21. 八尾南遺跡(第11次調査)」 『(財)八尾 「市文化財調査研究会報告25』
12	八尾南第12次 (YS88-12)	八文研	860	墓域	古墳時代	原田昌則 1995 「Ⅱ.八尾南遺跡(第12次調査)」 『八尾南遺
13	八尾南第13次	人文研	1800	生産域 居住域	弥生時代 古墳時代	跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告47』 成海佳子 1988 「23.八尾南遺跡(第13次調査)」 『(財)八尾
14	(YS88-13) 八尾南第14次	八文研	100	生 <u>塵</u> 壊	中世 近世 古墳時代	「市文化財調査研究会報告25』 「高萩千秋 1989 「5. 八尾南遺跡(第14次調査)」 『(財) 八尾
	(YS89-14) 八尾南第15次		<u> </u>	生産域	鎌倉時代 縄文時代?	市文化財調査研究会報告28 青木勘時 1989 「6.八尾南遺跡 (第15次調査)」『(財)八尾
15	(YS89-15)	; 八文研 :	846	河道		市文化財調査研究会報告28』
16	八尾南第16次 (YS89-16)	八文研	97. 38	1 1 1	1 - -	¦高萩千秋 1989 「7.八尾南遺跡(第16次調査)」 『(財)八尾 !市文化財調査研究会報告28』
17	八尾南第17次 (YS90-17)	八文研	436	居住域	弥生時代	原田昌則 1995 「III. 八尾南遺跡(第17次調査)」 『八尾南遺 跡 (財) 八尾市文化財調査研究会報告47』
18	八尾南第18次 (YS92-18)	八文研	352	居住域	古墳時代	西村公助 1993 「30. 八尾南遺跡(第18次調査)」 『平成4年
19	八尾南第19次	八文研	700	?	弥生時代	度八尾市文化財調查研究会事業報告』 西村公助 1994 「WI.八尾南遺跡(第19次調査)」『(財)八尾
20	(YS93-19) 八尾南第20次	人文研	46	居住域	古 <u>墳時代</u> 弥生時代	市文化財調查研究会報告43』 高萩千秋 1995 「29.八尾南遺跡(第20次調查)」 『平成6年
	(YS94-20) 八尾南第21次				古墳時代	度八尾市文化財調査研究会事業報告』 坪田真一 1998 「VI.八尾南遺跡(第21次調査)」『(財)八尾
21	(YS94-21)	八文研	708	¦居住域 ¦	¦弥生時代~古墳時代 	市文化財調査研究会報告61』
22	八尾南第22次 (YS95-22)	八文研	340	1	弥生時代~古墳時代	高萩千秋 1996 「VII. 八尾南遺跡(第22次調査)」 『(財)八尾 市文化財調査研究会報告54』
23	八尾南第23次 (YS95-23)	八文研	200	居住域生産域	¦弥生時代 ¦中世~近世	岡田清一 1999 「IV. 八尾南遺跡(第23次調査)」 『(財)八尾 市文化財調査研究会報告63』
24	八尾南第24次 (YS95-24)	八文研	34		¦弥生時代 古墳時代	高萩千秋 1996 「VIII. 八尾南遺跡(第24次調査)」 『(財)八尾 市文化財調査研究会報告54』
25	八尾南第25次	 - 八文研	294	 :居住城?	弥生時代 古墳時代	高萩千秋 2000 「25. 八尾南遺跡(第25次調査)」 『平成11年
26	(YS99-25) 八尾南第26次	 八文研	50	生産域	奈良時代以降 古墳時代	「度八尾市文化財調査研究会事業報告』 「高萩千秋 2005 「Ⅲ. 八尾南遺跡(YS20054-26)の調査」 『八尾
	(YS2004-26) 八尾南第27次			生産域	平安時代 古墳時代	市立埋蔵文化財調査センター報告6』 島田裕弘 2007『八尾南遺跡(第27次調査)』(財)八尾市文化財調
27	(YS2005-27) 八尾南第28次	¦ 八文研 ¦	1419	生医吸	平安時代~近世 奈良時代~平安時代	查研究会報告102
28	(YS2006-28)	八文研	約723	生産域 河道	平安時代~中近世	本書掲載
29	八尾南第29次 (YS2007-29)	八文研	24	古墳墳丘	古墳時代	¦成海佳子 2007『八尾南遺跡(第29次調査)』(財)八尾市文化財調 ¦査研究会報告112
30	長原遺跡第1次 (NG88-01)	八文研	8	-		成海佳子 1989 「24.長原遺跡(第1次調査)」 『(財)八尾市文 化財調査研究会報告25』
31	八尾南遺跡 範囲確認調査	市教委	190	? 生産域	古墳時代	米田敏幸 1981 「八尾南遺跡範囲確認調査」 『八尾南遺跡・
32	八尾南遺跡	市教委			平安時代	.東郷遺跡発掘調査概要 八尾市文化財調査報告 6』 :米田敏幸 1983 『八尾市埋蔵文化財発掘概要1980·1981年度
33	八尾南遺跡	市教委	\$\f\1020	 居住域?		(財) 八尾市文化財調査研究会報告 2 米田敏幸 1985 「4. 八尾南遺跡の調査」 『八尾市内遺跡昭
					(和59年度発掘調查報告書 八尾市文化財調查報告11』 米田敏幸 他 1981 『八尾南遺跡-大阪市高速電気軌道2号線
34	八尾南遺跡 	八尾調査会	36000	? 生産域・墓域・居住域 - 草域・民仕域	古墳時代	建設に伴う発掘調査報告書-』八尾南遺跡調査会
35	長原遺跡	長原調査会	9000 調査区Ⅲ		古墳時代 奈良~室町時代	永島暉臣 他 1982 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査Ⅱ』長原 遺跡調査会
36	八尾南遺跡	府教委	-	-	旧石器時代	福田英人 1989『八尾南遺跡-旧石器出土第3地点-』大阪府教育委員会
37	八尾南遺跡	府教委	3016			山田隆一・宮野淳一 1991『八尾南遺跡発掘調査概要・Ⅱ-大正川 流域調節池築造に伴う-』大阪府教育委員会
38	長原遺跡 (NG82-26)	大文協	_	河道	縄文時代	1982 『近畿財務局公務員宿舎に伴う長原遺跡発掘調査(NG82-
39	長原遺跡	大文協		<u>生産域</u> 集落	【平安時代 古墳時代	26) 略報 田中清美 1987 「13-a. 長原遺跡」 『乾式系土器研究 I 』 乾
40	(NG82-41) 長原遺跡			自然流路		式系土器研究会 -高井健司 1988 『昭和61年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘
	(NG86-3) 長原遺跡	大文協 :		工生學	旧石器時代〜近世 	調查報告書』
41	(NG93-56)	大文協 :	- i	集落	古墳時代	(財)大阪市文化財協会 1994 『葦火49号』 '
42	長原遺跡 (NG00-11)	大文協		? 生産域	十女时1(~如世	辻美紀 他 2002「長原遺跡発掘調査報告IX」
43	八尾南遺跡	大文セ			弥生時代 古墳時代	-
		調査機関			- 1項吋IC 季昌仝 市粉季・八尾	 表表音

調査機関名 府教委:大阪府教育委員会 市教委:八尾市教育委員会 八文研:(財)八尾市文化財調査研究会 八尾調査会:八尾南遺跡調査会 大文協:(財)大阪市文化財協会 長原調査会:長原遺跡調査会

状態で遺構が良好に残存しており、周堤を持つ竪穴住居内には壁に立てかけられた梯子やその他の構造物がそのまま遺存していた。墓域は1で確認され、方形周溝墓が12基検出されている。また、特筆すべき遺物として、小形仿製鏡破片が2で出土している。

古墳時代になると、これまでは遺構が希薄であった北部においても居住域が確認されるようになり、南部では居住域の縁辺部において方墳が検出されている。初頭から前期にかけては、13・34・37で居住域と墓域が確認された。中期から後期にかけては引き続き存続する13・34の居住域と墓域のほかに、3・8・12・18・25・29で新たに居住域や墓域が確認されるようになる。遺物に関しては8で韓式系土器と鞍が、3・18・34で韓式系土器が出土している。これらの遺物から従来とは異なる文化の流入が窺え、新たに展開する居住域では渡来人関連の成果が特に注目される。生産域については中央部から北部にかけて確認されており、3・7・10・34で水田面が検出されている。古墳時代の集落の大半は後期になって廃絶を迎える。西接する長原古墳群もこの時期に終焉することは、一帯の社会情勢における大きな変化を示唆するものと捉えられている。

飛鳥~奈良時代では遺物・遺構は点的に確認されており、全体的には希薄であるといえる。23 では中世~近世の耕作土の直下に弥生時代後期の遺物包含層が存在していることから考えると、当該期の地層は後世の耕地改変によって大きく削平されてしまった可能性が考えられる。西接する長原遺跡では大部分が水田であったことを考えると、当遺跡も同様に生産域であったものと思われる。

平安時代になると条里制が施行され、以後は正方位を基準とした区画に則った開発が行われる。居住域は後期の集落が1で確認されたのみであり、その大半は生産域となっている。明確な生産遺構は、低湿であったと考えられる遺跡北部に集中しており、3・7・10・27・31で氾濫堆積物に覆われた水田が検出されている。これに対して南部では、下面遺構として正方位に沿った耕作溝が検出されるくらいである。

鎌倉時代~近世にかけては、遺跡全域が生産域となり居住域は確認されていない。耕作地は度々 洪水に見舞われており、地層断面にその痕跡をみることができる。このような状況はやはり北部 で顕著であり、42では洪水砂を芯にする島畠状遺構が検出されている。近世以降は洪水も次第に 沈静化する傾向にあるようで、一帯は現代に至るまで低湿な環境下で水田が営まれ続ける。

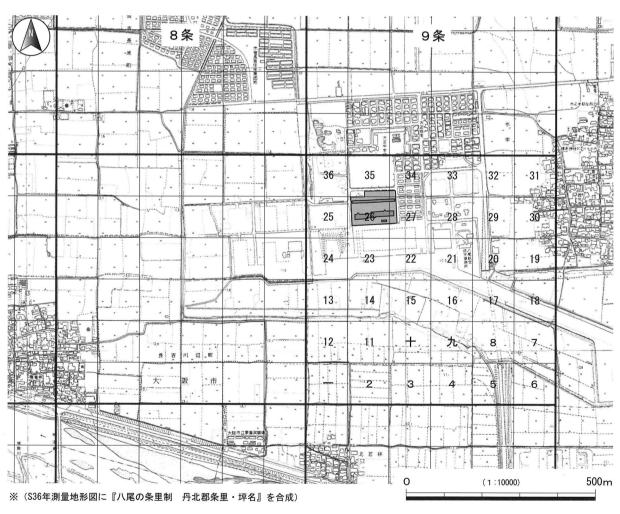
2 条里制について

条里制とは日本古代における耕地の区画法である。土地を郡単位で6町(約654m)四方に区画して「里」とし、里をさらに1町(約109m)四方に区切って36区画にわけ、そのひとつを「坪」とした。〇国〇郡〇条〇里〇坪とすることでその土地の位置を明確にできる。主に農地などの単位として利用された。班田収授法に基づく律令国家の土地把握の方法であると考えられているが、発掘成果から導き出される条里制の施行時期は平安時代が大多数を占める。条里制地割は現代においても大きな開発が及んでいない地域で部分的に残っており、空中写真や地図上において正方位を基準とした方格地割に見出すことができる。

八尾南遺跡の所在する地域は、平安時代前期の『延喜式』によるところの河内国丹比郡に属している。11世紀頃に丹比郡は大津道を境にして丹北・丹南の2郡に分割され、以後は丹北郡の所属となる。



第2図 調査地周辺の条里と国境



第3図 条里復元図

第2図は大阪府発行の昭和36年測量地形図上に条里を復元したものである。耕作地・水路などの区画から、ほぼ正方位に則った方格地割が認められる。また、丹北郡の坪名は西南隅を一ノ坪として北西隅を三六ノ坪とする坪付を行う。現代に残る坪名(漢数字で記載)から残りの坪名を復元し里境を導いた。

今回の調査区は、復元図上では丹北郡九条□里二六・二七ノ坪にあたる。調査の結果、正方位を基準とする河川が検出された。ところで、現在の調査地周辺における宅地・道路部の区画は、復元した条里区画とは一致せずにやや西に振る傾向が認められる。八尾空港とその周辺の道路の軸も同様であることから、現代の区画整備の段階では旧来の条里地割が放棄されていることになり、周辺の開発状況から判断して八尾空港の前身である阪神飛行場の設営がその契機になったと考えられる。

- 註 丹北群における条里呼称は、条名は数字で、里名については固有名で与えられている。本調査地の 里名は不明である。
- 註 本章は、鳥田裕弘 2007『八尾南遺跡第26次調査』─(財)八尾市文化財調査研究会報告102 (財)八 尾市文化財調査研究会 を一部改変して引用した。

参考文献

- ・米田敏幸 他 1981『八尾南遺跡-大阪市高速電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書-』八尾南遺跡 調査会
- ・棚橋利光 1982 『八尾市紀要第6号 八尾の条里制』八尾市教育委員会・八尾市史編さん室
- ・永島暉臣[他 1982『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ-大阪市高速電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書-』(財)大阪市文化財協会
- · 西村公助 1987「VI. 八尾南遺跡(第7次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告41』(財)八尾市文化 財調査研究会
- ·福田英人 1989『八尾南遺跡-旧石器出土第3地点-』大阪府教育委員会
- ·原田昌則 1995「I.八尾南遺跡第8次調査(YS87-8)」『八尾南遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告47』 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 1999 「Ⅳ. 八尾南遺跡(第23次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告63』(財)八尾市文化 財調査研究会
- ・辻美紀 他 2002『長原遺跡発掘調査報告IX-市営長吉長原東第2住宅建設工事に伴う発掘調査報告書-』 (財)大阪市文化財協会
- ・(財) 大阪府文化財センター 2006『大阪府立弥生文化博物館平成18年冬季企画展 弥生の村の風景-八尾 南遺跡の最新成果- 』

第2章 調査の方法と経過

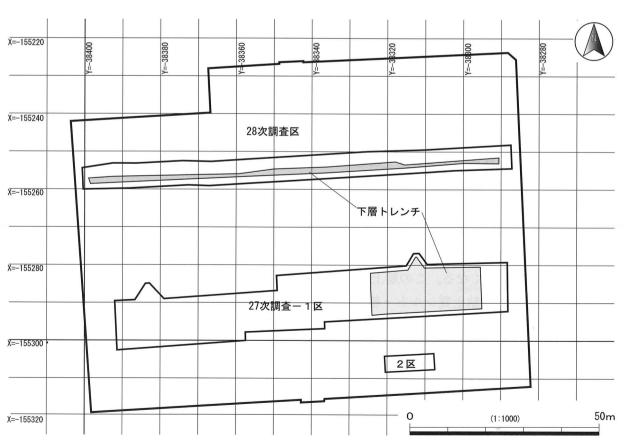
今回の調査は市営大正住宅地区道路整備に伴う調査で、当調査研究会が八尾南遺跡内で行った第28次調査である。調査対象範囲は道路部分(上幅6.35×114mm)で、地表下約2m程度までを上層調査とし、以下の下水管渠築造部分について幅1m・深さ1m程度の範囲を下層調査とした。調査面積は約724㎡である。

調査は2007年2月6日から開始、調査区設定・機械掘削を行った。土置き場・余地・ベルトコンベア数量の都合から、ほぼ中央部を境に東半部と西半部に2分して調査面毎に掘削・調査を行った。機械掘削に並行して、調査杭の設定やレベル移動を行った。調査杭の設定には、26次調査で使用した国土座標第VI系(新座標:世界測地系)の3級基準点を用いた。

全面調査は2007年3月15日に終了した。同時に下層調査を開始し、3月26日に終了した。その後、一部残った平断面実測に並行して後片付けや撤収作業を行い、3月30日に調査全工程を終了した。

掘削は重機による機械掘削と人力掘削を併用した。現地表下0.7~0.9mの機械掘削にて近世 以降の堆積層及び攪乱を除去し、以下0.4~0.6mを人力掘削により調査を行った。最終的に4 枚の遺構面を検出した。

地区割については調査区が東西に長いため、西から10mごとに $A\sim$ L区とした。西端はY=-38400、東端はY=-38287付近にあたる。



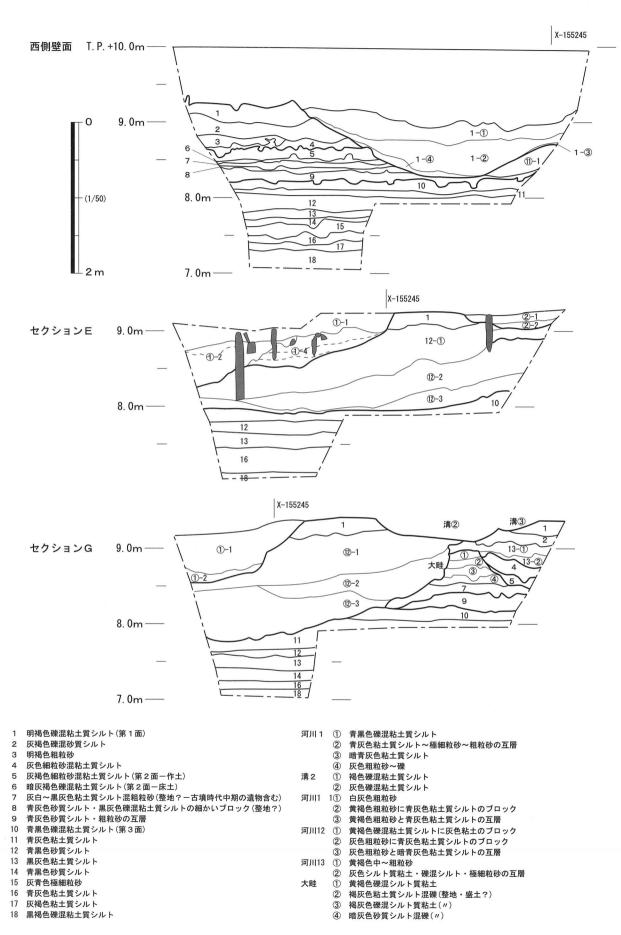
第4図 調査区位置図

第3章 調査概要

1 基本層序

今回の調査では、調査区にほぼ平行する河川を検出したため、基本的な地層は調査区西側壁面を参考に、第 $1\sim13$ 層を用いた。なお、第14層以下は下層掘削で確認した地層である。調査地の現状は旧市営住宅を取り壊した跡地で、現地表面の標高はT.P.+10m前後を測り、西側がわずかに高い。

- 第0層: 八尾空港及び旧市営住宅の建築・解体に伴うとみられる盛土・攪乱層。解体に伴うと みられる攪乱層は東半部に集中する。大半は第4層(現地表下1.5m)までに収束するが、 深いものは第13層(現地表下2.0m)にまで達している。その直下には空港建設以前の作 土などからなる0-1・0-2・0-3層が所々で遺存していた。
- 第1層: 明褐色礫混粘土質シルト、層厚0.2~0.3m。近世の作土層である。上面の標高はT.P. +9.2~9.4mで、東が若干高い。上面が第1面で、この層上面では河川・土坑・耕作 溝を検出した。
- 第2層:灰褐色礫混砂質シルト、層厚0.1~0.3m。第1層に伴う床土であろう。粘性が強く淘汰の良い撹拌層である。
- 第3層:明褐色粗粒砂、層厚0~0.3m。洪水砂または河川埋土と考えられる。層位から、第1 面で検出した河川⑬-1層に相当する可能性がある。
- 第4層:灰色細粒砂混粘土質シルト、層厚0.2~0.3m、中世の作土層である。上面には足跡や 踏込み等が見られ、第3層に覆われている。上面の標高はT.P. +8.5~9.0m程度であ る。この層上面が第2面で、大畦・水田を検出した。
- 第5層:灰褐色細粒砂混粘土質シルト、層厚0.2~0.4m、中世の作土・床土層である。上位の 第4層と同じく、波状痕跡・踏込み等が見られる。
- 第6層:暗灰褐色礫混粘土質シルト、層厚0.2~0.4m、中世の床土-農地のベースで、第2面の大畔はこの層上面から構築されている。上面の標高はT.P.+8.5~8.9mで、大畔直下が最も高い。
- 第7層:灰白~黒灰色粘土質シルト混粗粒砂、層厚0.1~0.2m。炭や古墳時代中期の遺物を含むブロック層で、整地の可能性がある。大畦直下に見られる。
- 第8層: 青灰色砂質シルト・黒灰色礫混粘土質シルトのブロック、層厚0.1~0.3m。第7層同 様整地層と考えられ、大畦(直下)で層厚を増す。
- 第9層: 青灰色砂質シルト、層厚0.1~0.3m。上面の標高はT.P. +8.5~8.3mで、この層も大 畦直下が高くなる。この層上面が第3面で、ピット・土坑・溝等を検出した。
- 第10層:青黒色礫混粘土質シルト・粗粒砂の互層、層厚0.1~0.6m。中央部で層厚を増し、ラミナが認められることから、河川流路を形成していたものと考えられる。
- 第11層:青灰色粘土質シルト、層厚0.1~0.3m。粘性の低い地層である。
- 第12層:青黒色砂質シルト、層厚0.2m前後。
- 第13層: 黒灰色粘土質シルト、層厚 $0.1\sim0.2$ m。締りの良い土壌化層である。上面の標高は $T.P.+7.6\sim8.0$ mで、東が高い。この層上面が第4面で、ここでは溝を検出した。



第5図 地層断面図(西壁・セクション)

第14層:青黒色砂質シルト、層厚0.1~0.2m。

第15層:灰青色極細粒砂、層厚0.2m前後。調査区西部に見られる。ラミナ構造が認められることから、流水堆積層と考えられる。

第16層:青灰色粘土質シルト、層厚0.1~0.4m

第17層: 灰褐色粘土質シルト、層厚0.1m前後。調査区西部に見られる。植物遺体を少量含む地層で湿地性の堆積層と考えられる。

第18層: 黒褐色礫混粘土質シルト、層厚0.3m以上。締りの良い土壌化層で、遺構面の存在が示唆される。

2 検出遺構と出土遺物

ここでは主な検出遺構のみ記述することとし、法量・埋土等の詳細は、一覧表にゆだねる。

【第1面】

第1面は近世〜近代の遺構面である。遺構検出は機械掘削終了後の第1層上面で行った。ここでは、河川2条(河川1・8)、土坑(土坑5・6)、溝6条(溝2〜4・7・9・10)を検出した。

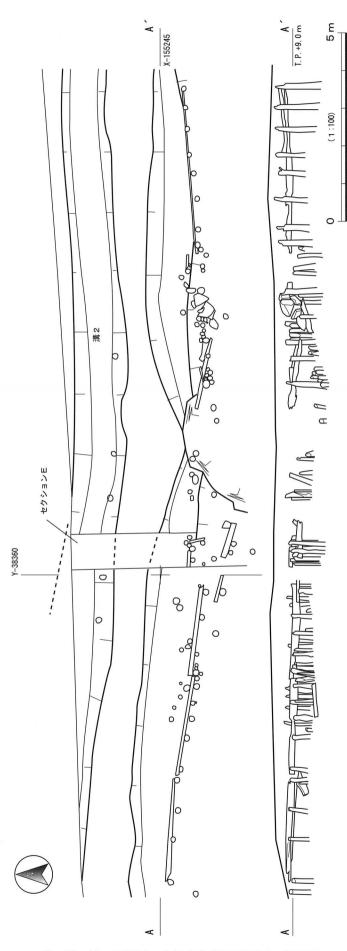
土坑5・6および溝2~4・9・10は耕作に関する遺構である。河川8はほとんどが攪乱と一致しており、詳細は不明である。

河川1

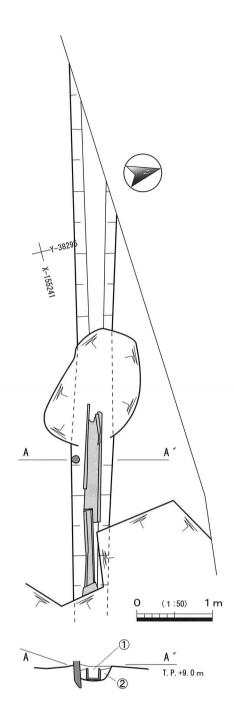
ほぼ東西方向に伸びる河川である。幅 4 m以上・検出長35 m・深さ1.3 m以上を測る。調査区内では幅は未確認であるが、5 m以上になるものと考えられる。北岸には土留めや河川に平行する杭列や直交する杭列が構築されている。土留めは岸に沿って杭を打ち、杭と岸の間に横板を挟んだもので、釘や紐などで止めた痕跡はない。横板は転用材である。水際までいけるようにしたものか、一部に石を積んだ部分がある。河川に平行する杭は $A \sim B$ 区北岸で検出したもので、これも土留め施設の痕跡かもしれない。河川に直交する杭列はC 区東部で検出したもので、北岸の溝状の窪み(幅 1 m・長さ 2 m)の東西に沿って河川内部まで6 本ずつ打ち込まれていた。橋・洗い場等の痕跡の可能性がある。

埋土は上層の①青黒色礫混粘土質シルトと下層の②青灰色粘土質シルト~極細粒砂~粗粒砂の 互層に分かれ、肩に③暗青灰色粘土質シルト、肩から底にかけて④灰色粗粒砂~礫が堆積してい る。主に②から近世の陶磁器類が出土しているが、①からは陶製土管、ガラス瓶などの近代の遺 物も出土していることから、空港建設まで機能していた河川と考えられる。

遺物の出土量は多く、1~38(第10・11図)が出土している。1~5は陶器である。4はいわゆる京焼系の碗で、高台裏に「清水」の印刻がある。5は唐津焼系の碗である。6~18は肥前系の磁器である。6~14は碗、15は蓋、16・17は小皿、18は筒形碗である。6は網目文、7~8は雪持笹等の草花文を主とする文様、10の見込みにも草花文をモチーフにした文様が、いずれも手描きで表現されている。7・8の高台裏には圏線内に「銘」風の文様が描かれている。11~14はいずれも印判手で、11は体部に蕪・見込みに紅葉、12の体部には菊花と丸、13の体部と見込みには菊花、14の体部には丸文他が施されている。15は口縁部内面に四方襷文、外面にも幾何学文様が描かれている。16の見込みには富士山に雁、17は無文で見込みに蛇の目釉剥ぎが見られる。小皿16・17は、ともに輪花状の口縁部を呈している。18の外面には草花文、見込みには印判手による五弁花がスタンプされている。



第6図 第1面河川1内杭出土状況平面図・立面図 (横断面図は第5図セクションEを参照)



① 暗灰色粘土質シルト ② 白灰色礫に青灰色粘土質シルトの ブロック

第7図 第1面溝7平断面図

19~22は神仏具と考えられる陶磁器である。19は御神酒徳利で、肩に刻目が施され、内面の下部に施釉されている。20はひょうそくである。21・22は受付きの燈明皿(受付皿)で、22は受部の切込みの形から、京都・信楽系の物と考えられる。

23~25は土師器(土製品)で、23は羽釜、24は風炉、25は火鉢である。26は連歯下駄で、後歯は 欠損している。27は皆折釘である。28は粘板岩製のカケ硯である。29は型合わせ技法で作られた 土製の鳩笛である。

30~36は瓦である。30・31は右巻三巴文軒丸瓦である。30の珠文は大きく、巴も太い。31の巴の尾は細く、一周して円形となる。32は近世の軒平瓦である。33は蹄顎を持つ平安時代前期以前唐草文軒平瓦である。上外区・脇区に珠文をめぐらせる。34~36はいずれも1枚づくりの平瓦で、凹面は細かい布目、凸面には縦位の縄目叩き目を施すもので、これも平安時代前期以前のものと考えられ、軒平瓦33と同時期のものである。33・34はともに二次焼成をうけており、破断面にまで煤が厚くこびりついていることから、破砕後転用され、長期間火を受けたものと推測される。

37は中世の瓦質土管である。**38**は内黒の黒色土器椀で、退化した高台が巡る。平安時代中~後期のものと考えられる。

溝 7

東部の I・ J 区で検出した。東西からやや北にふって伸びる溝である。内部に木枠が埋設されている。河川 8 からの取水・排水施設と考えられる。底板・側板が遺存しており、蓋板は一部にのみ遺存していたが、全体に蓋があったかどうかは不明である。各板は、釘で止められている。

【第2面】

第2面は中世の遺構面である。ここでは河川3条(河川11~13)、大畦1条・水田を検出した。 河川11

調査区全域の南西側が河川11の範囲である。西部A~D区では北岸を河川1に切られている。中央部D~E区では河川12に切られており、詳細は不明であるが、概ね東西の流路をもつものと推定される。

河川12

D~I 区で検出した。南東-北西に伸び、河川11を切っている。北肩で大畦を切っており、大畦との接点には大畦-①層が取り付いている。北壁際に深さ1.2mに達する掘込みがあり、④層ブロックで充填されている。③層から、土師器小皿(39~41)・黒色土器(42)・土師器鍋(43)・須恵器杯身(44)等が出土している。39~41は退化した「て」の字状口縁部をもつ土師器小皿で、平安時代末期頃のものである。42は大型の高台をもつ内黒の黒色土器椀で、平安時代後期(瓦器椀出現直前)のものと考えられる。43は舌状を呈する土師器鍋の把手、44は須恵器杯身で、ともに古墳時代中~後期(5世紀後半~6世紀前半)のものである。

河川13

I~K区で検出した。概ね南東-北西に伸び、大畦・河川12を切っている。G区以東では、大畦北側の第4層(作土)上面に、河川13の埋土が堆積していることから、河川13の氾濫によって水田が埋没したことがわかる。内部から土師器杯(45)・瓦器椀(46)・須恵器杯蓋(47)・杯身(48)が出土している。45は指押さえの圧痕が顕著に残る平安時代前~中期の土師器杯、46は鎌倉時代前期の瓦器椀、47・48は古墳時代中期(5世紀中頃)の須恵器杯蓋・杯身である。

大畦

E区以東、河川11の北側に位置する。西ほど規模が大きく、高い。途切れながらも、規模を縮小して東端まで伸びている。6層上面に礫の混ざった粘性の強い土を数枚盛って構築されている。大畦より北に水田作土があるが、平面的には検出できていない。また、大畦に取り付く小畔などは検出できなかった。盛土上部の①層から黒色土器椀(49)、下部の④層からは須恵器杯蓋(50)、杯身(51)が出土している。49は内黒の黒色土器椀で、内面のヘラミガキは密で体部と見込みを分化する。平安時代中~後期のものと考えられる。50・51は古墳時代後期(6世紀中頃)の須恵器杯蓋・杯身である。

【第3面】

平安時代頃の遺構面である。河川12・13で南西側は削平されている。検出遺構は、小穴14個(小穴21~26・31~35・41)、土坑2基(土坑27・36)、溝4条(溝37~40)、落込み1か所である。

調査区中央部のE~H区では、小穴を主とした遺構、東部のI~K区では溝を主とした遺構が構築されている。西部の遺構群は、極めて矮小な面積であるにもかかわらず、密に検出された。これらの遺構群は、居住域に直接深くかかわるものと考えられるが、明確にはできなかった。いずれの遺構も、土師質の極小片が少量出土した程度である。一方、北東端で検出した**落込み**-②層は水田作土の可能性のある粘土質シルトで、第9層上面にも水田が広がっていた可能性がある。

【第4面】

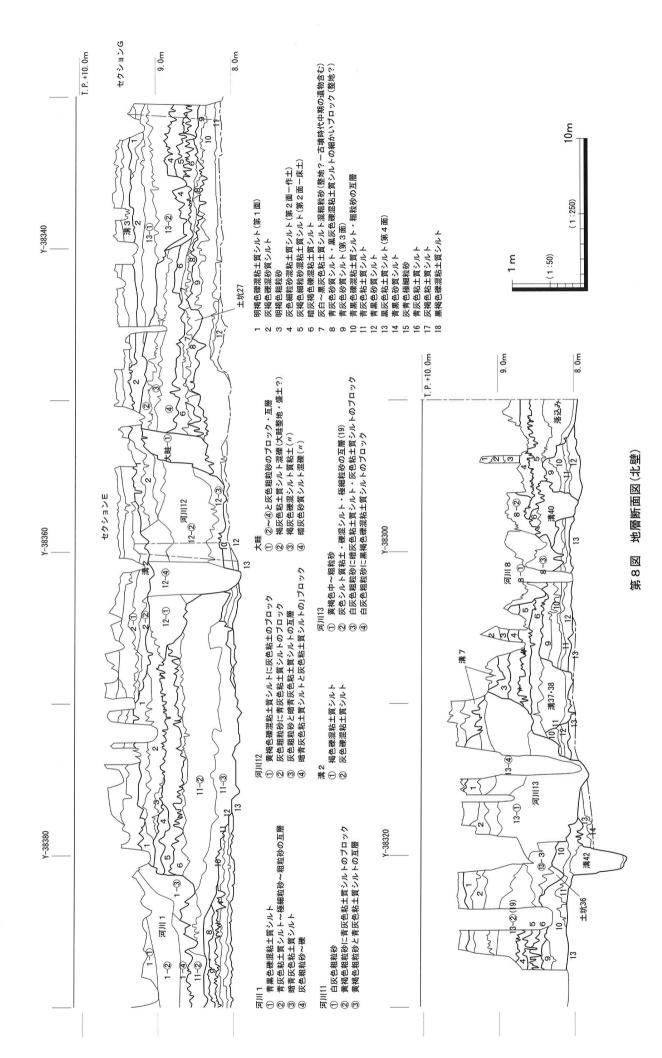
奈良時代以降の遺構面である。ここでは溝1条(溝42)を検出した。

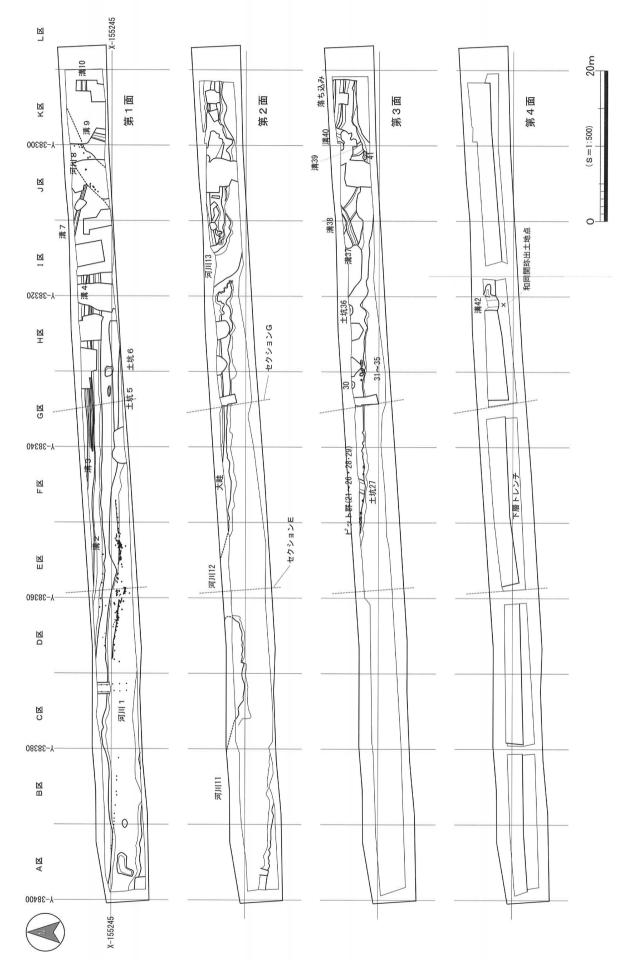
溝42

H区東端で検出した。ほぼ南北に伸びる。平面的な調査は行えなかったため、詳細は不明である。埋土は礫が主で、ここからの湧水は夥しかった。内部から、銅銭「和同開珎」が出土した。「和同開珎」はポピュラーな古代の出土銭であるが、今回出土の52はいわゆる「新和同」で、輪・郭が整然としており、文字も直線的である。径24~24.5mmを測る。

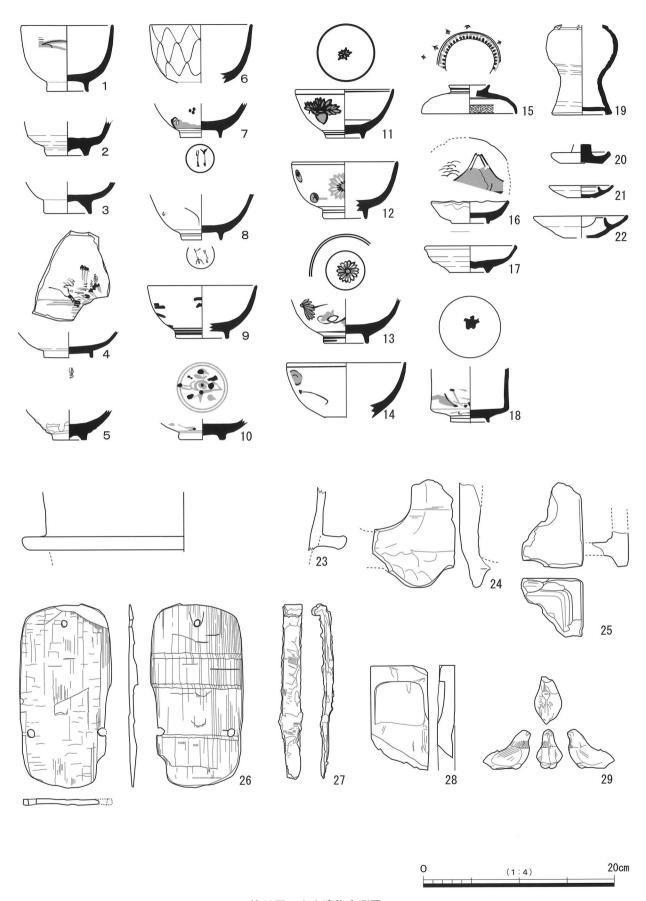
参考文献

- ・中村 浩 1980「第6章 和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ 大阪府文化財調査報告書 第30輯』大阪 府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・法隆寺昭和資材帳編集委員会 1992『法隆寺の至寶 第15巻―昭和資材帳―』小学館
- ・中世土器研究会編 1995『中世の土器・陶磁器』真陽社
- · 兵庫埋蔵銭調査会 1996『日本出土銭総覧』
- ・九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年―九州陶磁学会10周年記念―』
- ・江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房
- ・小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究―日本律令土器様式の成立と展開、7~19世紀―』

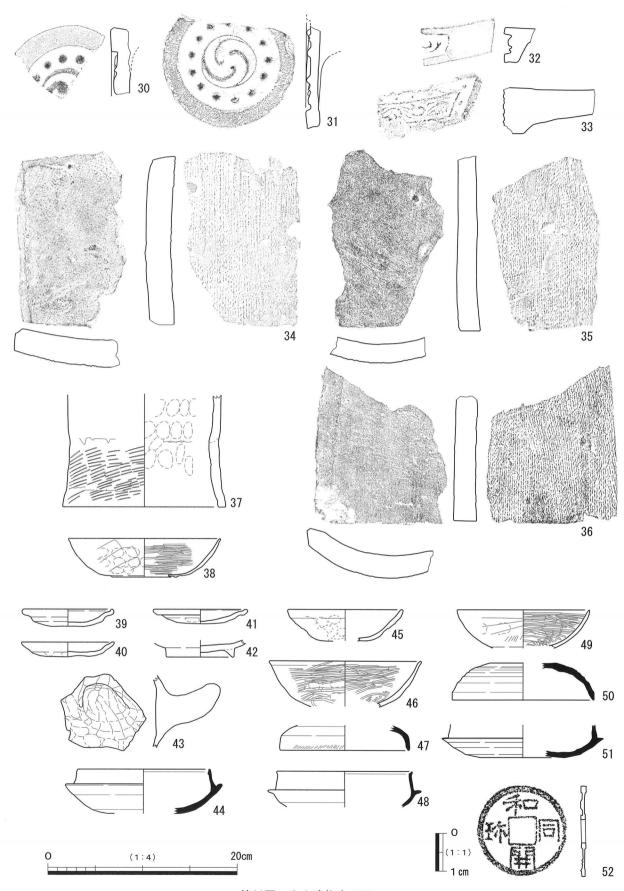




第9図 平面図



第10図 出土遺物実測図1



第11図 出土遺物実測図2

第2表 検出遺構一覧表

		出遺構-	一覧表	1 B #			Im I	1th 44.	into other
遺構名	地区名 A~H	方向	形状· 検出長	法重寺 幅	深さ	(I)	埋土 青黒色礫混粘土質シルト	遺物 1~38	備考 杭・横矢板を伴
Ж ЈЛЦ 1	А~п	東一西	35	4以上		2	青灰色粘土質シルト~極細粒砂~粗粒砂の互層 暗青灰色粘土質シルト~極細粒砂~	1 -00	5
溝 2	D~ I	東一西	50	0.8~	0.3	_	褐色礫混粘土質シルト		鋤溝、溝10と
				1.5		2	灰色礫混粘土質シルト		同一か?
溝 3	E~I	東一西	30	0.3~ 0.5	0.3~ 0.5	_	褐色礫混粘土質シルト		鋤溝
溝 4	H∼I	東一西	6	1	0. 1		褐色礫混粘土質シルト 灰色礫混粘土質シルト		鋤溝
土坑 5	G	平面	断面	径	深さ		暗青灰色粘土質シルト〜粗粒砂のブロック		
		楕円形	逆三角形	0.35~ 1.3	0. 18				
土坑 6	G∼H	隅丸方形	半円形	1.3~ 1.35	0. 1	1	褐色礫混粘土質シルト		
溝 7	I ~ J	方向	検出長	幅	深さ	1	暗灰色粘土質シルト		河川8に合流?
		東南東一 西北西	7	0.4~ 0.6	0.4~ 0.6	_	白灰色礫に青灰色粘土質シルトのブロック		
河川8	J∼K	南西一北	12. 5	3	0.4	1	青灰色礫混砂質シルト・粘土質シルトの互層		杭を伴う
		東				2	灰色粘土質シルト・極細粒砂・植物遺体の互層		
溝 9	K	南南西一	2	0.7~	0.05		暗青灰色礫混粘土質シルト 青灰色礫混砂質シルト・粘土質シルト・植物遺体の互層		溝7と直交
		北北東		0. 9					
溝10	К	東一西	1. 5	0.5~ 0.7	0. 1	1	灰褐色礫混粘土質シルト		溝1の延長か?
河川11	В∼С	方向 東一西	検出長 45	幅 4前後?	深さ 0.9	① ②	白灰色粗粒砂 黄褐色粗粒砂に青灰色粘土質シルトのブロック		河川12に切ら れる
		ж п	40	111112	υ. 9	_	黄褐色粗粒砂と青灰色粘土質シルトの互層		_
河川12	D~J	西-東	60	10	1.2	1	黄褐色礫混粘土質シルトに灰色粘土のブロック	39~44	河川11・大畦
							灰色粗粒砂に青灰色粘土質シルトのブロック		を切る
						_	灰色粗粒砂と暗青灰色粘土質シルトの互層 暗青灰色粘土質シルトと灰色粘土質シルトのブロック		
河川13	F∼K	南南東一	25	8	1. 2		黄褐色中〜粗粒砂	45~48	大畦を切る
		北北西					灰色シルト質粘土・礫混シルト・極細粒砂の互層		
						1 -	灰白色粗粒砂に暗灰色粘土質シルト・灰色粘土質シルトのブロック		
大畦	E~K	市市	60	下幅	高さ		白灰色粗粒砂に黒褐色礫混粘土質シルトのブロック ②~④と灰色粗粒砂のブロック・互層	②層 49	河川13に切ら
八唑	L K	***	00	2.0		1	褐灰色粘土質シルト混礫	④層 50⋅51	
				上幅		1	褐灰色礫混シルト質粘土		
4.01	E	717 ===	Mar. com	1.5 径	深さ	_	暗灰色砂質シルト混礫 田畑名際名島地上院シュー	_	
小穴21	_	平面 楕円形	断面 半円形	1± 0.5		1	黒褐色礫多量粘土質シルト 青灰色〜黒灰色粘土質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴22	Е	楕円形	半円形	0. 5		1			
小穴23	E	楕円形	半円形	0.45	0.08		11.17		
小穴24 小穴25	F	楕円形 楕円形	半円形	0. 35 0. 3	0. 1	-			
小穴26	F	楕円形	半円形	0. 25			黒褐色礫混粘土質シルト		
土坑27	F	方形?	半円形	1.6	0.15	_	黒灰色礫多量混粘土質シルト		
						1	黒色炭混粘土質シルト		
小穴28	F	楕円形	半円形	0, 25	0.05		暗青灰色礫混砂質シルト 黒褐色礫混粘土質シルト		
小穴29	F	楕円形	半円形	0. 4	0.4	1	黒褐色礫混粘土質シルト		
小穴30	G		半円形	0.85			黒灰色礫多量混粘土質シルト		
小穴31 小穴32	G	楕円形 楕円形	半円形	0.2 0.35~	0. 07 0. 15		褐色粘土質シルト 黒褐色礫多量粘土質シルト	-	
11/(92	G	相口が	十口形	0.35~ 0.6	0, 15				
小穴33	G	楕円形	半円形	0. 35		-	黒褐色礫多量粘土質シルト		
小穴34	Н	楕円形	半円形	0.35			黒褐色礫多量粘土質シルト		
小穴35	н	楕円形	半円形	0.4~ 0.85	0.05		黒褐色礫多量粘土質シルト		
土坑36	Н	楕円形	半円形	1. 5	0. 15	4	灰褐色極細粒砂~礫混粘土質シルト 暗灰色礫混粘土質シルト		
溝37	I ~ J	方向	検出長	幅	深さ	1	青灰色粗粒砂・灰黒色粘土質シルトの互層		溝38と合流
		東北東- 西南西	6. 2	0. 7	0.4	2	青灰色粘土質シルト		
溝38	I ∼ J	東南東一西北西	4. 5	1. 7	0.4	1	青灰色粗粒砂・灰黒色粘土質シルトの互層		溝37と合流
溝39	J~K	南東一北	1. 7	1.2	0, 3	1	青灰色粘土質シルト 青灰色粗粒砂・灰黒色粘土質シルトの互層		
溝40	K	西南東一	1. 1	1.5	0.5	_	青灰色粘土質シルト 青灰色粘土質シルト混粗粒砂		
794TU	``	北北西	1.1	1.0		2	白灰色礫		
小穴41	J	平面 瓢箪型	断面 半円形	径 0.6~	瓢箪型 0.3	1 '	褐色粘土質シルト		小穴2個か
		加华王	L11/10	1.0					
落込み	К	方向 南一北	検出長 6.4	幅 1.5	深さ 0.45	_	青灰色粗粒砂と青灰色粘土質シルトの互層 青灰色粘土質シルト		②層は作土ので 能性あり
溝42	H~ I	南一北	1.7	2. 1			白灰色礫	52	
	1	1					暗灰色粘土質シルト		

第3表 出土遺物観察表

	RP 1 4	(I) 4-16-F		法量(cm)		d± par			
番号	器種	出土地点	口径	器高	底 径	特徴			
01	陶器碗	河川1	9.6	7. 0	4. 4	外面に染付けあり、畳付露胎			
02	陶器碗	河川1	4. 6	3. 7	4. 2	畳付露胎、兜巾高台			
03	陶器碗	河川1	8.8	3. 4	4. 6	貫入あり、目砂付着			
04	陶器碗 (京焼系)	河川1	_	残存高 2.7	5. 1	見込みに風景、高台裏に「清水」の印刻、高台脇〜裏 面露胎、貫入あり			
05	陶器碗 (唐津焼系)	河川1	9. 2	3. 2	3. 6	体部下半~高台裏露胎、兜巾高台			
06	磁器碗	河川1	10. 1	残存高 6.1	_	網目文			
07	磁器碗	河川1	_	残存高 3.6	4. 2	手書きの草花文、高台裏圏線内に銘あり、畳付露胎			
08	磁器碗	河川1	_	残存高 4.8	4. 0	手書きの草花文、高台裏圏線内に銘あり、見込みに蛇 の目釉剥ぎ、畳付露胎			
09	磁器碗	河川1	11. 2	5. 6	5. 2	手書きの草花文			
10	磁器碗	河川1	_	残存高 2.2	4.6	外面・見込みに手書きの草花文、畳付露胎			
11	磁器碗	河川1	10. 2	5. 1	3.8	印判手 外面蕪、見込みの圏線内に紅葉、蛇の目釉剥 ぎ、畳付露胎			
12	磁器碗	河川1	4. 4	6. 0	4. 4	印判手 外面菊花・丸、畳付露胎			
13	磁器碗	河川1	_	残存高 4.7	4. 4	印判手 外面菊花他、見込みの圏線内に菊花、畳付露 胎			
14	磁器碗	河川1	12. 4	残存高 5.8		印判手? 外面丸他、見込みに圏線			
15	磁器蓋	河川1	9. 7	3. 0	4. 0	外面つまみ際に 文、体部に菱形、内面口縁部に四 方襷文			
16	磁器皿	河川1	7. 3	2. 2	3. 6	見込みに富士山、輪花口縁			
17	陶器皿	河川1	9. 2	2. 8	4. 2	輪花口縁、見込みに蛇ノ目釉剥ぎ			
18	磁器筒形碗	河川1	_	残存高 5.6	4. 0	風景・草花文? 見込みの圏線内に五弁花			
19	陶器花瓶 (御神酒徳利)	河川1	最大径 7.6	残存高 9.6	6. 0	外面露胎			
20	陶器灯明皿 (ひょうそく)	河川1	6. 0	残存高 2.0	4. 4	灯心部上端欠損			
21	陶器灯明皿 (受付皿)	河川1	6. 8	1. 3	3. 2	外面露胎			
22	陶器灯明皿 (受付皿)	河川1	9.8	2. 3	3. 6	外面露胎、受部に切り込みあり			
23	土師器羽釜	河川1	鍔 径 34.0	残存高 6.7		ヨコナデ			
24	土師器風炉	河川1	現存幅 8.5	残存高 10.3	_	指ナデ			
25	土師器火鉢	河川1	現存幅 6.4	残存高 8.9	_	指ナデ			

番号		出土地点		法量(cm)		特徴
H 7	7171年	штым	口径	器高	底 径	
26	下駄	河川1	長 さ 19.5	幅 9.1	厚 さ 1.0	
27	鉄釘	河川1	長 さ 18.5	幅 2.0	厚 さ 1.8	
28	硯	河川1	長 さ 11.0	幅 6.0	厚 さ 1.8	
29	土人形 (鳩笛)	河川1	高 さ 4.1	幅 2.2	長 さ 4.9	
30	軒丸瓦	河川1	瓦当径 13.5	瓦当面のみ	外縁幅 2.2	
31	軒丸瓦	河川1	瓦当径 13.4	瓦当面のみ	1. 9	
32	軒平瓦	河川1	瓦当幅 7.8	瓦当面のみ	外縁幅 0.7~4.9	唐草文か?
33	軒平瓦	河川1	瓦当幅 11.1	瓦当面のみ	外縁幅 1.5~2.0	
34	平瓦	河川1		残存長 17.8	11. 1	
35	平瓦	河川1	_	残存長 17.8	残存幅 11.1	
36	平瓦	河川1	_	残存長 17.8	残存幅 11.1	
37	瓦質土管	河川1	17. 2	残存高 11.8	_	外面タタキ・ナデ、内面指押さえ・ナデ
38	黒色土器椀 (内黒)	河川1	16. 0	残存高 4.1	6. 6	外面指押さえ、内面密なヘラミガキ(体部と見込みを分化)
39	土師器小皿	河川1	9. 4	残存高 1.8	3. 3	
40	土師器小皿	河川1	9. 6	残存高 1.5	5. 4	
41	土師器小皿	河川12	9. 7	1.6	3. 9	
42	黒色土器椀 (内黒)	河川12		残存高 1.8	6. 8	内面へラミガキ
43	土師器鍋	河川12				ハケか?
44	須恵器杯身	河川12	14. 8	残存高 4.7	16, 6	回転ケズリ、回転ナデ、外面受部に自然釉、別固体溶 着
45	土師器杯	河川13	12. 0	3. 3		外面指押さえ
46	瓦器碗	河川13	16. 0	残存高 4.8		外面指押さえ後やや粗いヘラミガキ、内面密なヘラミガキ(体部と見込みを分化)
47	須恵器杯蓋	河川13	13. 5	残存高 2.7		回転ケズリ、回転ナデ、外面口縁部にハケ状の圧痕あ り
48	須恵器杯身	河川13	14. 2	残存高 3.8		回転ケズリ、回転ナデ
49	黒色土器椀 (内黒)	F区大畦上 部	13. 8	残存高 4.0	_	外面指押さえ、内面密なヘラミガキ(体部と見込みを分化)
50	須恵器杯蓋	J区大畦下	15. 0	4.8	_	回転ケズリ、回転ナデ
51	須恵器杯身	J区大畦下	17. 3	残存高 3.5		回転ケズリ、回転ナデ

第3章 まとめ

今回の調査では奈良時代から江戸時代に至るまでの4面の遺構面を検出することができた。調査対象とした遺構数は37、遺物量は整理用コンテナ4箱分である。

主な成果は中世から近世にかけての耕作面と河川の復元であり、氾濫堆積物に覆われて中世の大畦(第2面)が残存していたことが特筆される。本報告では、「大畦」としたが、河川11に伴う「堤」とも呼べる遺構である。北側壁面(第8図)に見られるように、河川12との接点(Y-38352~38355付近)には、大畦の流出土あるいは川浚え時の土が貼付いたような状態となっていることがわかる。大畦は盛土で構成されており、盛土内部には古墳時代中~後期や平安時代の遺物(49~51)が含まれていることから、近隣にあった過去の集落域の土を利用していることがわかる。大畦・河川11はほぼ東西に伸びており、ともに条里制地割に則った遺構である。また、同様に第1面で検出した近世の河川1も条里に規制され、流路を固定された川といえる。ただし、いずれも大規模な遺構であるにもかかわらず、第3図に見られるように、坪境には一致していない。

遺物は、古墳時代中期・後期・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・江戸時代のものが出土しているが、全体としての遺物量は少なく、その大半は河川・溝からの出土であり、地層や遺構の時期を決定するには乏しいといえる。そのなかで、唐草文軒平瓦(32)・平瓦(33~36)・和同開珎(52)が特筆に値する。唐草文軒平瓦・平瓦は、平安時代前期以前、奈良時代にまで遡り得る資料であり、和同開珎52の出土とも相俟って、調査地近隣に当概時期の瓦葺の建物が存在した可能性を高める資料である。あえて建物の位置を求めるならば、河川1・溝42の上流-東方~南方に求めることができる。また、河川1からは、古墳時代中~後期の遺物の出土もあり、近隣の調査地との繋がりを示している。

最後に本調査地における土地利用の変遷を概観して今回の調査のまとめとしたい。

第4面では**溝42**が検出された。遺構面は自然地形と捉えられ、東が高く西が低い。溝はほぼ南北に伸びる、溝を挟んで東が1段高くなることから、これも条里制地割に則った遺構の可能性がある。この面は、氾濫堆積物である第10層によって廃絶する。

第3面では、西部で小穴群・土坑、東部で溝を主とする遺構を検出した。西部は生活に密着した場であったと考えられ、東部は水田の可能性がある。第3面廃絶後、西部の9層上面は、第6~8層によって、整地が行われる。第3面の時期は明確にし得ないが、第4面で和同開珎が出土していること、第2面**大畦盛土**内の出土遺物から、奈良時代以降平安時代中期以前と言える。

第2面では、東西流する河川11とそれを切る河川12・13・大畦が検出された。大畦は整地層上部に盛土によって造られ、その北側に水田が作られる。大畔盛土内部上層から、平安時代中~後期の遺物が出土していることから、その造営はそれ以後と言える。ただし、長期間存続していた可能性は高く、当初の造営時期は遡る可能性は高い。この水田は河川13の氾濫によって埋没するが、大畦のピークまでは埋まりきらなかったようである。河川13からは鎌倉時代前期の瓦器椀46が出土していることから、第2面埋没の時期はそれ以後といえる。

第1面では、河川・耕作溝・土坑が検出された。河川1は第2面河川11の上部にあたり、規模を縮小して、ほぼ同様の流路をもつ。同時に河川1北側には耕作地が広がり、安定した状況下で連綿と水田耕作が続けられることになる。

そして、昭和13(1938)年の「阪神飛行学校(現八尾空港)」の設営と、翌年の「大正飛行場」への改称に伴う大規模な拡張とを契機に、調査地周辺は大きく改変されることになり、長らく受け継がれてきた条里制区画に則った農村は放棄されることになる。さらに、第2次世界大戦後、空港周辺は市営住宅を主とする住宅街に変貌していった。

参考文献

- ・原田昌則他 1984『木の本遺跡―八尾空港整備事業に伴う発掘調査―』(財)八尾市文化財調査研究会報告 4 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1993「30. 八尾南遺跡第18次調査(YS92-18)」『平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
- ·島田裕弘 2007『八尾南遺跡(第27次調査)』 (財)八尾市文化財調査研究会報告102 (財)八尾市文化財調査研究会 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・大阪航空局八尾空港事務所 2005『八尾空港へようこそ』



第1面西部(西から)



第1面東部(東から)

図版二 第二面



第2面西部(西から)



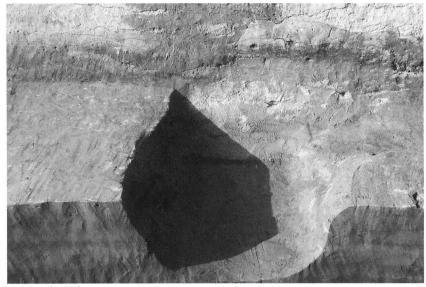
第2面東部(東から)



第3面西部(南から)



第3面東部(東から)



第4面溝40(南から)



和同開珎出土状況(北から)



同上拡大(北から)



調査前の状況(東から)





調査杭設置(北東から)



人力掘削開始(南西から)



A区河川1掘削(南西から)



A区河川1上層遺構(北東から)



E区河川 1 杭周辺掘削(南西から)



第1面平板測量(西から)





E~F区同(南西から)



E区同(北西から)



E区同(南東から)



J区溝7検出時(南から)



溝7完掘(北西から)



溝フトレンチ掘削(南東から)



J区河川8掘削(西南から)



E区河川12掘削(南東から)

F区同(東から)



I 区河川13掘削(南西から)



I 区大畦検出時(西から)



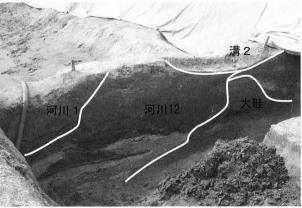
H区以東河川12・大畦(南西から)



H~I区河川13・大畦(南西から)



J~K区河川13·大畦(南西から)



セクションG東面(南東から)





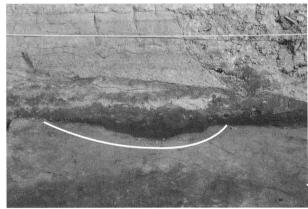
I~J区同(南東から)



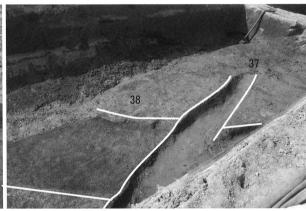
J~K区同(北西から)



土坑27・小穴28・29(北から)



土坑36(南から)



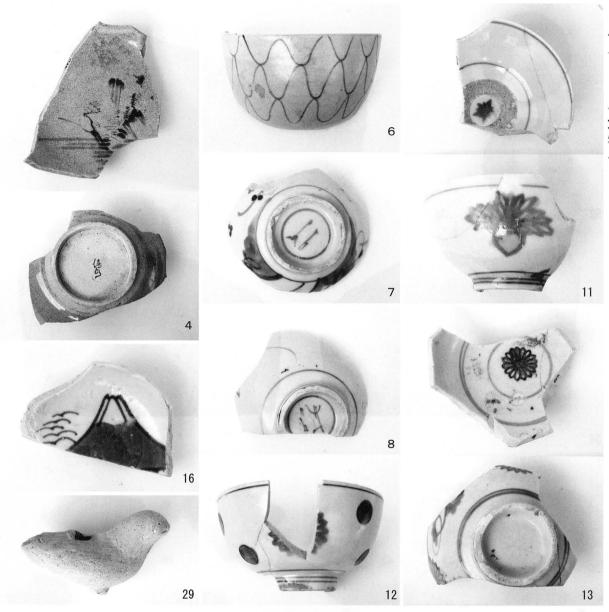
溝37・38(北東から)



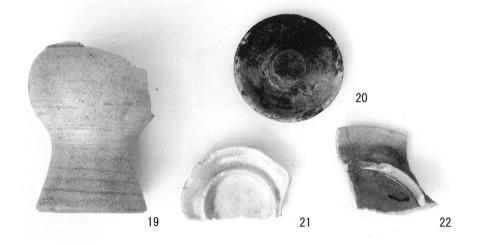
北側壁面実測(南東から)



G区溝40周辺平板測量(南東から)



河川1出土遺物



報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく
書名	(財)八尾市文化財調査研究会報告114
副書名	八尾南遺跡(第28次調査)
巻次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	114
編集者名	成海佳子
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所 在 地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西曆2008年 3 月 19 日

が所	収	遺	な 跡	が所	り が 在	な 地	コ- 市町村	- ド 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 原因
八	i みな 尾 南 28岁	遺	跡			こしき もと 哲木の本	27212	67	34度35分 05秒	135度35分 47秒	20070206 ~ 20070330	約724	道路整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項						
	集落	奈良時代	溝	和同開珎							
八尾南遺跡	集落	平安時代(前半)	土坑・小穴・溝	_							
(第 28 次 調 査)	生産域	平安時代(後半)	河川・大畦・水田	古式土師器・土師器・須 恵器・黒色土器・瓦器							
	生産域	江戸時代	河川・土坑・溝	国産陶磁器・土師器・土 製品・下駄・釘・硯・瓦							
	奈良~江戸時代を通じて、条里地割りに則った溝・河川等が検出された。和同開珎や古代瓦の出土は、										
	 に当該時期の建物等の存在を示唆している。平安時代(後半)の大畦は、「堤」ともいえる大規模なもので、前時										
要約	代の生活配	代の生活面を整地して造られており、土木技術の一端が窺える。また、大畦盛土内からは、古墳時代中期に									
	遡る遺物の	O出土もあり、既往調査請	調査の成果を裏付けるこ	とができた。							

財団法人八尾市文化財調査研究会報告114 八尾南遺跡(第28次調査)

発 行 平成20年3月

編 集 財団法人八尾市文化財調査研究会

〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2

TEL • FAX 072-994-4700

印 刷 株式会社 近畿印刷センター

